



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	武蔵野における古代集落の一考察：住居址の構造と変遷
Author(s)	岡田，淳子
Citation	北海道大学人文科学論集，24，17-33
Issue Date	1986-03-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34388
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_PL17-33.pdf



武蔵野における古代集落の一考察

——住居址の構造と変遷——

A Treatise on the Ancient Settlement in the Musashino Region

岡 田 淳 子
OKADA, Atsuko

- I Preface
- II Analysis of the house structure
- III Change in the house style
- IV Conclusion

- I 序
- II 構造の分析
- III 住居の変遷
- IV 結語—住居相互の関係—

I 序

本論で取扱う武蔵野の古代集落は、東京都八王子市中野町、通称中田にあったもので、中田遺跡と呼ばれている。多摩川に注ぐ浅川と川口川の合流点に近く、付近一帯は昭和40年まで水田として耕作されていた。水田のなかに約1万m²の微高地があり、古地図によれば、明治時代から畠地として利用されていたらしい。この微高地全体が、古代の集落址であることが明らかとなった。約1年間に亘る発掘調査の結果、148軒の家の跡と、2本の水路跡が確認されたからである¹⁾。

発見された家の跡（竪穴住居址）のうち、連続的に居住していたと考えられる時期——古墳時代後期から平安時代にかけての住居址は、125軒であった。これらの住居址を土器型式²⁾によって編年したのが、次に示した数字である。

これらの住居址の構造を分析し、土器編年を基礎に変遷を辿ろうというのが、本論の目的である。

構造分析の指標は、発掘調査により観察し得るものに限定することとした。検討を進めたのは次の項目によっている。

住居址の分析指標

- | | |
|----------------------|--------------|
| 形 状；縦横壁長の割合、隅の形、壁の状況 | 柱 穴；有無、本数、位置 |
| 大きさ；床面積 | 貯蔵穴；有無、個数、位置 |
| 竈 ；方位、位置、構造 | その他；遺物の出土状況等 |
| 周 溝；有無、特徴 | |

年 代 (西暦) dates	土 器 型 式 期 ceramic types (sub-periods)	住 居 数 number of houses	住居数小計 total number by periods	備 考 notes
A.D.年 ↓ 600 ↓	鬼 高 期 I (Onitaka-I) 鬼 高 期 II (Onitaka-II) 鬼 高 期 III (Onitaka-III)	軒 30 30 13	軒 74 (鍛冶址1を含む)	I _a I _b 13→17 II _a II _b 16→14
700 ↓	真 間 期 I (Mama-I) 真 間 期 II (Mama-II)	10 19	30 (不詳1を含む)	
800 ↓	国 分 期 I (Kokubu-I) 国 分 期 II (Kokubu-II)	11 8	21 (破壊住居2を含む)	
		121	125	

土器型式期に対応する住居数
Number of houses by sub-periods

以上の他、掘方面積、深さ、柱穴間の長さ、住居の方向、石製品・土製品・鉄製品、紡錘車など注意すべき伴出遺物も追求してみたが、指標として取り出すには複雑すぎるため割愛した。

住居址の一般的な構造は、上の指標に示されているように、方形の堅穴住居である。内部構造は壁際に粘土で築いた炊事用の竈が一個と、貯蔵穴と考えられている方形の穴とがあり、四本柱を基調とする柱穴、壁面構造をたすけたと思われる床周囲の溝が認められる。しかし、これらは、住居の規模や時期による変異が大きく、普遍的とはいえない。

住居構造の分析と遺物の編年の推移を総合すると、鬼高期IとIIをそれぞれ二分し、9つのグループでとらえることが出来た。このグループは、ある一時期の平面として、同時に建っていた家を想定してもよいと思われる。

当集落の年代についてみると、残念ながら絶対年代を示すものは皆無である。鬼高期が古墳時代後期、すなわち西暦六世紀に比定されるであろうことは、多くの研究者によって考えられているところであるが、六世紀のどのあたりに位置するかをはっきり示せるものは、今のところなさそうである。中田遺跡で確認されたことは、鬼高期Iの前半の土師器に伴って須恵器第III型式の坏が発見され、同時に円筒埴輪類似のものが使用されていたことである。その後、鬼高期II後半には、口縁が“く”の字状になる焼きのよい薄手の坏がでてきて、一つの特徴を示すし、鬼高期IIIには内側に暗文のある坏が、この時期に限ってあらわれる。この二つは他の地域との比較を可能にするものであろう。国分期IIはロクロ成形のみによる大量生産の坏が使用されているが、これに伴って布目瓦が発見される。これらは年代を比定できる資料といえるで

あろう。

以上のことから、細かい年代は示せないが六世紀から九世紀のはじめ頃までの間に、9区分ができたことになり、30年位の間隔でとらえられた、ということになった。

II 構造の分析

1) 鬼高期 I 前半

この時期に属する住居12軒を抽出したが、これらが一度に建てられたとは考えにくく、一度に放棄されたとも思われない。次々と建てられ、また次々と住み代えられたと考える方がむしろ妥当であろう。そういう状態のなかで、出土土器や住居のあり方から見て、同類性の求められるものを一括したのがこの一群である。あるいはこの12軒が同時に建っていたことがあったかもしれない。(面積の求められない1軒は除いてある)

この一群に共通していえることは、形状では家の平面が正方形に近く、縦・横の辺の長さの割合、すなわち壁長幅示数は98~100%で、非常に良く整っている。大きさは、床面積が最大112m²、最少33m²、平均70m²である。竈は北西側壁のほぼ中央にあり、垂直で直線的に掘られた壁の内側につくられることを常とする。壁の直下に幅10cm、深さ15cmほどのU字溝が掘られるが、これを全体に掘った後に、竈の位置を決めたことが明らかなものが多い。すなわち、正方形住居をかたちづくって後に、竈をどこに造るかを考えたことが注目される。住居自体の竈穴の深さが30cm~50cmと浅いものが多く、竈もあまり高くは築かれずに、馬蹄形に粘土と砂でかためている。煙道に土製の円筒を使ったものが5軒みとめられた。この円筒は円筒埴輪を想起させ、両者のつながりを感じさせた。竈内の煮沸用土器をのせる台は、赤塗りの高坏を伏せて利用したものと、専用の土製支脚を用いたものがあり、この違いは住居の位置によってまといめられるようである。周溝は既に述べた通り壁下を全周しており、すべてしっかりした溝で、15~20cmおきに小穴のあけられている家も2軒あった。これは定説となりつつある壁体構造をあらわすものとみるべきであろう。柱穴はすべての住居址に存在し、4本柱を基本としている。床面積60m²を超すと、間に1本ずつ加わって6本になり、80m²に至ると8本になる。入口付近の補助柱、竈前の補助柱を加えて12本あるものもあるが、穴の深さ・太さから4隅の4本柱が最もしっかりした主柱だったという考えは変らない。

貯蔵穴は謂ゆる張出しピットで、竈と相対した南東壁の中央付近に、壁を外側に掘出して作られている。大きさは1m~1.8mの一边をもつ方形で、深さも床面から1m近いものまであり、この種の穴としては大型の部類に入る。この穴は長方形から正方形に近いものまで、また、すべてが壁の外に掘り出されているものと、半分は床面側を削って掘り下げているものなど、まちまちであった。この穴の用途については依然として決め手を欠く。しかし、縁に土器や粘土が置かれているものが多く、蓋をすることも可能と考えられる点や、ピットの壁に何かが押し

付けられていた形跡などから、塩野半十郎氏の、「しおれるようなものを入れておいたのではないか」という説をとりたい。おそらく乾燥を防ぐ貯蔵庫であったろうと、現在では考えている。貯蔵穴の縁にあった粘土で、塩野氏が、土器を焼いたところ、土師器と同じような土器が出来上った。その他、床面についても特記すべきことがある。4本柱に囲まれた中側や竈の前面は、硬くしまったはっきりした床であることが多く、外側は硬い床面がみられずに、黒色土が敷かれたように見られるのが通常である。このことは未開社会の定住住居がそうであるように、柱の外側は何かを敷いて寝るための場所に当てられていたと推測される。出土遺物については、とくに石製・土製模造品が目についた。石製円板や剣形模造品と伴って、土製の管玉・勾玉・小玉などの存在が特徴的で、12軒中7軒から発見されている。紡錘車についても6軒で計14個の出土があり、他の時期に比べて豊富であった。また殆どの家から少数ながら須恵器が発見され、6軒から鉄製品の出土もあった。この時期の住居は大型で形が整い、室内の構造についても既に完成されているとみる事が出来る。たしかに、中田遺跡の堅穴住居のなかでは、もっとも整備された時期だったのだと思われる。

2) 鬼高期Ⅰ後半

17軒を取り出したが、そのうち1軒は完成半ばで放棄されたものらしく、これを除く16軒について考えることにした。このなかの3軒は前時期の住居と同時期に使われていたと考えてもよい。この一群の住居の形状についていえることは、全体的にみて整理された形態が少しずつ崩れてきたといえる。すなわち壁長幅示数が95%まで長方形化し、大きさは60m²から15m²までと小型化して平均床面積30m²となる。竈が住居内、壁の中央付近につくられることは変わらないが、泥岩や粘土ブロックを袖芯にすることが多くなり、竈内では高坏を台に利用することよりも、専用の棒状ゴトクを多く使っているように見える。周溝は、まだほとんどが全体にめぐっているが、浅く細くなる傾向をもち、半周のもの1軒、ないもの3軒というように、以前のようにしっかりしたものではなくなってくる。周溝を掘る際に竈の位置をあらかじめ意識し予定するのか、その部分を掘らずに残すものがあらわれ、このことは張出ピット周辺でも同様である。柱穴は4本柱を基調とし、住居址の規模との相関からか、6~8本柱はなく、ほとんどが4本柱であるが、はっきりしないものや、なかったと思われるものが4軒(25%)も出てくる。貯蔵穴にも変化があらわれ、張出しピットは小さく丸く変化し(6軒)、遂には方形住居内に入り(2軒)、住居の隅に位置が移動する(7軒)。このうち2軒では二隅にわかれ、2個ずつ持つものがあつた。ピット付近から甕・坏などの土器、土器の原材の粘土が発見されるのは前時期と変わらない。その他住居内の利用の仕方について、一隅に平石と編物石が発見されたり、粘土と土練り台が発見されたりした家がある。編物石と名付けたものは、長さ10~15cm、幅4~5cmの細長い円礫で、かつて塩野半十郎氏によってむしろなどを編む時の錘と考えられたものである。平石には何らかによる磨擦痕のあるものや、前述のように粘土と共に見出されたものもあり、こ

れ等の発見物は、家の一隅が作業場となっていた可能性を示していた。ことに土器の材料になったと思われる白色粘土は、鬼高期Ⅰの住居30軒のうち6軒で、貯蔵穴のまわりや床の一隅から多量に発見され、これらの家で土器作りが行われたことは疑う余地がないと思われる。この時期の住居址で気付いたもう一つのことは、竪穴壁上に土が積まれていたとみられることであった。当遺跡での発掘に経験を積んだ結果判明し得たもので、発掘の初めの頃は見逃してしまったのではないと思う。それ程、見極め難いものではあったが、住居の壁上掘方から外に50～70 cm 幅で住居内の三角堆土と同質の土がめぐっている事実があった。また一部分では2 m 四方に高まりが広がる部分があり、何かの施設の存在を考えさせた。これらの高まりは、住居から掘り上げた土による土堤の存在として認めてもよいと思う³⁾。

3) 鬼高期Ⅱ前半と後半

鬼高期Ⅱの住居址とした30軒のうち、2軒は、後世の住居が建てられるなど、攪乱により分析不可能なものであった。残る28軒について、使用された土器から鬼高期Ⅰに近いものと、それ以後のものに分けることを試みたが、どこで一線を引くかはたいへん難かしい問題であった。出土遺物の土器器が、貯蔵用と煮沸用の二種の甕、甕・坏・高坏とすべて揃っている場合はよいが、いくつか欠けると判断がつきにくくなる。このような難題をかかえたまま、前半14軒、後半14軒に分けてみた。しかし、この二つの群を比較した場合、土器には変化がみられるが、住居構造の変異について論じることがむずかしい。

形状についてみた場合、正方形が崩れて不整四角形に歪んだり、長方形に向う傾向があらわれることは事実だが、一般に縦横辺の示数は96%～88%と長方形化してくるなかで、集落中央付近の地区では依然として98%以上の整った正方形に近いものがみられる。これは鬼高期Ⅱ後半になっても同じことで、まだ98%のものが残っている。これはむしろ地区別の伝統として捉える方がよさそうに思われる。鬼高期Ⅰでも集落址の中心部には、形の整った住居が多かったが、その伝統が受け継がれたとみられるであろう。隅は、まだ大部分がそのまま角をなしているが、少しずつ丸味をもち、とくに一隅だけが丸く作られる場合がみられる。大きさについて床面積をみると、前半は15～25m²のものが圧倒的に多く、平均20m²、後半になっても同じく平均は20m²と広さは平均化してくるといえる。竈は北西壁の中央または少し右寄りに造られる。数の上では半数が右にずれている。竈の構造は高さを増し、袖に砂岩の切石を柱状に入れたり、後半にはその2本の柱の上にもう一本の切石棒を渡して組んだものもあらわれる。煙道の上端は、竈が壁線の内側に築かれることから、このままでは煙が家の外に出なかったものと思われる。壁の内側にみつかった煙出しの孔が、どのような構造で外に出されたものか、これを知る手掛りは遂に見出されていない。また竈の奥で上の方が壁から多少外側へ掘り出されているものを4軒みとめたが、時代を追って外側に造り出される前ぶれと見られる。竈のなかで使われる煮沸用土器の台も高坏を使ったもの6軒、専用の土製支脚を使ったもの5軒、石を使ったもの1軒

で、前半・後半による特徴的な変化はない。周溝は半数についてかなりしっかりと作られ、壁下全体にめぐらされている。この場合竈の下にみられるものもあるが、意識的に竈の付近や貯蔵穴の付近には溝を掘らないものもある。また住居の平面が正四角形ではないことを修正するように、狭い部分には溝を掘らないような処置もとられている。周溝を確認できなかったものは9軒あった。これは住居の大小によるものではなく、床面の状況によるもののようであった。例えば、湿気の多い地区や、褐色土内に床を作っている場合などに多いので、別の構造があったのかもしれない、あるいは確認が困難だっただけかもしれない。周溝のないものが増えるだけでなく、この時期になると床面に柱穴のないものが目立ち、かつて一般的だった4本柱を持つ家は半数になってしまった。柱のある家が中央地区に多いのは、前に述べたような住居作りの技術によるものかもしれない。貯蔵穴は張出しピットがなくなり、住居内に一個作られることが多くなる。位置は、竈の右である北東隅（8軒）と、右下にあたる南東隅（7軒）に多く全体の半数以上を占める。また2個ずつある家が3軒あった。ピット付近からまとまった土器の出土が多いことは、前の時期と同じである。

その他、床面に大型の炭化材が出土した家が6軒あり、火災のあとを示していると思われた。火災は住み終えた後、故意に焼き捨てることもあったろうといわれるが、ここではそうは思われない。この6軒はどれも竈及びピット付近、あるいは床中央に完形土器等多数の遺物の出土があり、住んでいる時に火災によって焼失したとみる方が妥当と思われたからである。後半の家から紡錘車1、土製玉、刀子状鉄器がそれぞれ1個ずつみつまっているが、鬼高期Ⅰに比べると、この出土量はいちじるしく少ないものである。

以上のように鬼高期Ⅱの住居址は土器の上から前後に分類できても、住居址の構造上ではとりたてて示し得る変化がなかった。

4) 鬼 高 期 Ⅲ

この時期の特徴ある長甕を出土する家は14軒あったが、そのうち1軒は鍛冶工房址と考えられ、人が居住した家ではないと思われるので、13軒について分析した。

形状は、壁長幅示数が79～94%と長方形化が進み、ゆがんだ不整四角形や台形がふえてくる。隅も約50%のものが丸くなっている。大きさは、最大のもので床面積23m²、最小のものでは7m²で、平均14m²（畳8じょう）と小型化が進む。竈は60%がまだ壁の内側に築かれているが、多少外に掘り出すものもあり、2軒については半分程も外に出ているものがある。保存の良好なもので構造をみると、泥岩や自然の扁平円礫を芯にして、焚口だけでなく、両側全面及び天井の一部まで組んでいるものがあり、竈としては発達してきた様子がうかがえる。位置は70%以上が北壁の中央にあり、土製支脚が一般化する。高坏の使用はみられないが、これは土製高坏そのものが使用されなくなったことにもよると思う。周溝は全体にめぐるのは40%以下に減少し、竈付近を除くなどして一部のみ作ることが多く、確認できないものも3軒あった。しっ

かりしたものは少ない。柱穴は4本柱の原則が崩れ、4本認められたのは1軒のみで、まったくなかったと思われるものが35%、その他は不規則に柱穴状のピットが発見されている。なかに、床の中央に1本しっかりした柱穴をもつものがあり、住居面積の減少を反映したものと思われる。貯蔵穴の有無は半々であり、その位置は、竈の右が $\frac{2}{3}$ 、左が $\frac{1}{3}$ で、その他の例はない。

その他、遺物としては土製玉の出土した家が2軒、紡錘車出土2軒、鉄製品の出土した家が3軒あり、前時期にひきつづいてわずかながら土製玉が使用されていたこと、鉄器が普及しはじめたことも注意される。この一群で気付いたことは、遺物が竈と貯蔵穴付近にまとまって発見された家が50%を越えていたことである。このうち2軒は火災による放棄が推定できたが、あとの5軒は道具を置いたままどこかへ去ってしまったのであろうか。定住的農耕社会で家財を置いて立ち去る場合は緊急性をもつか、あるいは遠方に移動してしまう場合が普通のものである。これらの家を除いた5軒は対照的に遺物が少ないが、このなかに暗文のある坏が見出され、遺物を多く残した家に暗文がみつからないこととともに、注目すべきものと思う。坏の底部の篋削りがはっきりしてくるのも、この時期からである。

住居ではないため取上げなかった鍛冶工房址は、床面積 9m^2 の小さなものであった。竈・周溝ともなく、平面長方形、竪穴は浅くその壁に沿って柱穴が4本ある。おそらく屋根は葺き下されていなかったものと思う。この工房址も含めて、住居は中央地区付近にかたまり、住居総面積の減少と合わせて人口の減少も考えなければならない。

5) 真間期 I と II

真間期は、坏型土器の形態から二つの時期に分割して考えることができるので、この分類を試みたところ、30軒中10軒が真間期 I に19軒が真間期 II に属するらしいと考えられた(不詳1)。しかし、住居構造には新旧の差は、はっきりと浮かびあがらなかったで、まとめて記述することにした。

分析指標に従って、形状は、縦横の壁長幅示数が74~96%と変異が大きくなり、正方形に近いものから矩形までさまざまである。隅丸のものは約 $\frac{2}{3}$ に増加し、従って壁がわずかに曲線化した胴張り傾向のものもでてくる。大きさは、とくに大型なもの2軒を除くと床面積平均 11m^2 で、一段と小型化している。また前の時期になかった現象として、 31m^2 、 45m^2 という、平均の3~4倍の床面積をもつ住居があらわれ、集落の生活のなかに何かの変化が出てきたように思われる。そして、この傾向は次の時期にも引き継がれて行くように見える。竈については、ほとんどのものが壁の外に掘り出されるが、遺存のよいものでみると、竈構造の $\frac{1}{3}$ から $\frac{2}{3}$ は外にのびている。焚口と火床は壁の内側につくられ、床を掘り込む構造は前と変らない。また壁の中央につくられた竈は少なく、右(45%)、左(30%)に片寄り、壁の隅から $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{1}{4}$ 付近につくられることが多い。袖は、甕・泥岩・自然石を芯にして築いたものもあるが、それらが見られず粘土だけで築いたものが多い。火床には石がおかれ、これが煮沸用土器の台になったと思

われるが、土製支脚を作ることにはなかったようである。周溝は竈を意識し、その部分を除いて掘ったと思われ、竈部分を除いて全周しているものが60%と多い。その他全体に周らされていないもの15%や、まったく作らなかったと思われるもの25%がある。この時期の周溝の深さは、10cm前後でそれ程深くないが、幅が広くなることに特徴があり、幅が一定していないものもみられる。ことに竈の右側隅で溝が大きくふくらみ、貯蔵穴のない住居のなかで、代りの役割りを果たしていたのではないかと思われる。柱穴はほとんどの家になく、壁上や周溝内に不規則に存在するものがある。4本柱を基本にしていたと思われる家は、全体の $\frac{1}{4}$ に当たる7軒であり、それらは一様に大型な家である。通常の10m²前後の家では、床に柱穴を掘ることはなかったらしい。貯蔵穴は周溝のところでふれたように、みつかっていない。

その他、特徴的なものをあげると、土製玉の発見は皆無となったが、破片ながら須恵器の出土が急増したこと、刀子や鏃等の鉄器と砥石そして鉄製の紡錘車が新たに加わったことが注目しに値する。紡錘車は、鉄軸のついた鉄製品に加え、土製・石製を合わせて5個出土しているが、すべて大型の住居からの発見であった。台地の南端に近く建てられた住居で、廃絶後塵芥捨場として使われたものがあつた。この住居は真間期の早い時期に住まれたものと思われるが、その後自然埋没の途次、おびただしい甕の破片を含む多くの土器が捨てられ、それは真間期の終りまで続いたものと思われる。

6) 国分期 I と II

この時期には坏がロクロ製法の須恵質となり、その点真間期との間に一線が引けるようである。国分式土器を出土する家は21軒あつたが、このうち2軒は破壊されて詳細をとり出すことが出来なかった。土器の型式的な研究から、2つの時期に分類した国分期住居の数は、前半11軒、後半8軒であつた。国分期 I、IIとしてとり出されたものである。

住居址の形状は、一般的には隅丸方形ということもできようが、不整四辺形や台形が多く、壁長幅示数を求めるのは難しい。隅は75%まで丸くなり、全体としては胴張りのものが多くみられる。壁は垂直ではなく、斜めになって床に達しているものが多く、全体としては崩れた印象を与える。大きさは真間期より更に小さくなり、大型の2軒を除いた平均面積は約9m²、大型の2軒も約20m²にすぎない。竈の位置は、国分期 I については前時期までと同じく北西壁にあるが、国分期 II ではすべてが東壁に作られるという変化があらわれる。理由のたしかなことはわからないが、この2つの間には住に対する考え方の変化があつたように思われる。これを別にすれば国分期の2つのグループの家はほとんど変化していない。竈は壁の中央よりも左右に片寄せて造られることの方が圧倒的に多い。竈の構造は以前とあまり変わらず、壁の内側に焚口を設け、床を少し掘り窪めている。焚口の両側には泥岩や自然石を芯にして袖を作り、上部にも芯を入れて組むことがあるが、これに瓦を用いたものもある。焚口は低いが、ここから壁に向って高く粘土を築き上げ、壁を1m程三角形に掘り進めて、最後は直径10cm前後の煙出し

となる。焚口を除く竈の大部分が家の外に張出してしまうのは、国分期に特徴的なものといえよう。周溝はほとんどの住居で確認された。はっきりしないものは少なく、あまり深くはないが幅広でしっかりした溝がめぐっている。ただし、竈の位置は最初に定められるらしく、竈の右と左が直線にならず、食い違ったり、角がついたりしており、溝は竈の下には入らない。貯蔵穴と思われる穴は、どの家にも確認されなかったが、竈の右側が浅い窪みになったり、周溝がひろがったりして、台所部分を作り出しているように見られるものもある。柱穴は一般に無い。不規則な穴が1~2カ所あるものが5軒、壁上に2個の穴がみつかったものが1軒あるが、住居の規模が小さいため柱穴をつくる必要性がなかったのであろう。最大の住居1軒のみに4本柱がみられたことは、これを裏付けているように思われる。

国分期の住居の特徴は以上の通りであるが、その他気のついたことを上げると、床面の良好なものは少なく、凹凸のはげしいもの、部分的張床をもち床面の軟弱なものなど一定していない。竈の前は窪んでいるものが多く、竈付近や竈内に、土師器甕や台付甕がみられるのが普通である。しかし、遺物は前の各期に比較して非常に少ない。比較的遺物の多かった家が3軒あったが、これはどれも住居規模の大きい家で、鉄製品の発見も伴っている。紡錘車は2軒で発見されたが、1個は石製、1個は須恵器破片を削って作られたものであった。鉄器は19軒中7軒で出土をみたが、これは国分期以前と比較すると大きな割合を占めている。火災で焼けたと思われる5m²の小住居から、鉄器6点と砥石など数の上では多い発見があったので、実際の普及率はずっと高かったと考えることができよう。この火災によって捨てたと思われる家からは、大量のどんぐり（こならの実）が炭化して発見された。稲作農耕に依存して暮していたとはいえ、まだ植物採集の手はゆるめていなかったものと思われる。

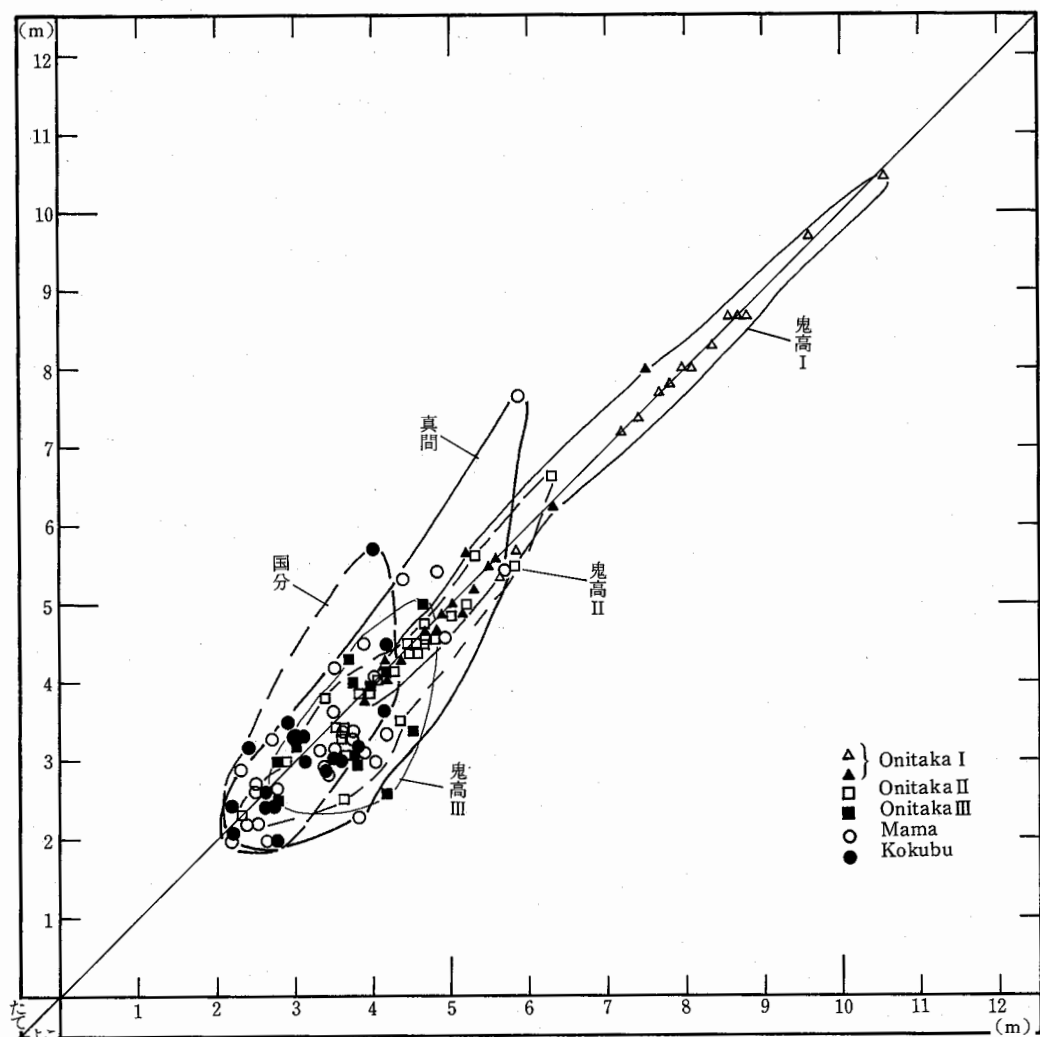
III 住居の変遷

1) 形状と床面積

関東地方の鬼高期の住居は、胴張り隅丸方形が正方形に変わり、竈がつくりつけられることに特徴があるといわれる。たしかにその通りであるが、中田遺跡の分析結果では鬼高期のなかでも時間を追って変化して行くさまが知られた。

正方形・長方形という形をはっきりさせるために、縦横の壁の割合を求め、壁長幅示数として示したが、各時期の示数の平均をとると、99→97→94→88と次第に長方形化して行くことがうかがえる。

〈図表1〉は、 x 軸に竈のある壁、 y 軸にこれと直交する壁の長さをとって点を落したものである。それぞれの点から x 軸、 y 軸に垂直な線を引けば、住居址の形と床面積の概略がわかる。 x 軸および y 軸に45°で交わる線上に点があれば正方形であるわけだが、鬼高期Ⅰ前半では、ほとんどすべてがこの線上に沿っている。煩雑さをさけるため、鬼高期Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、真間期、国

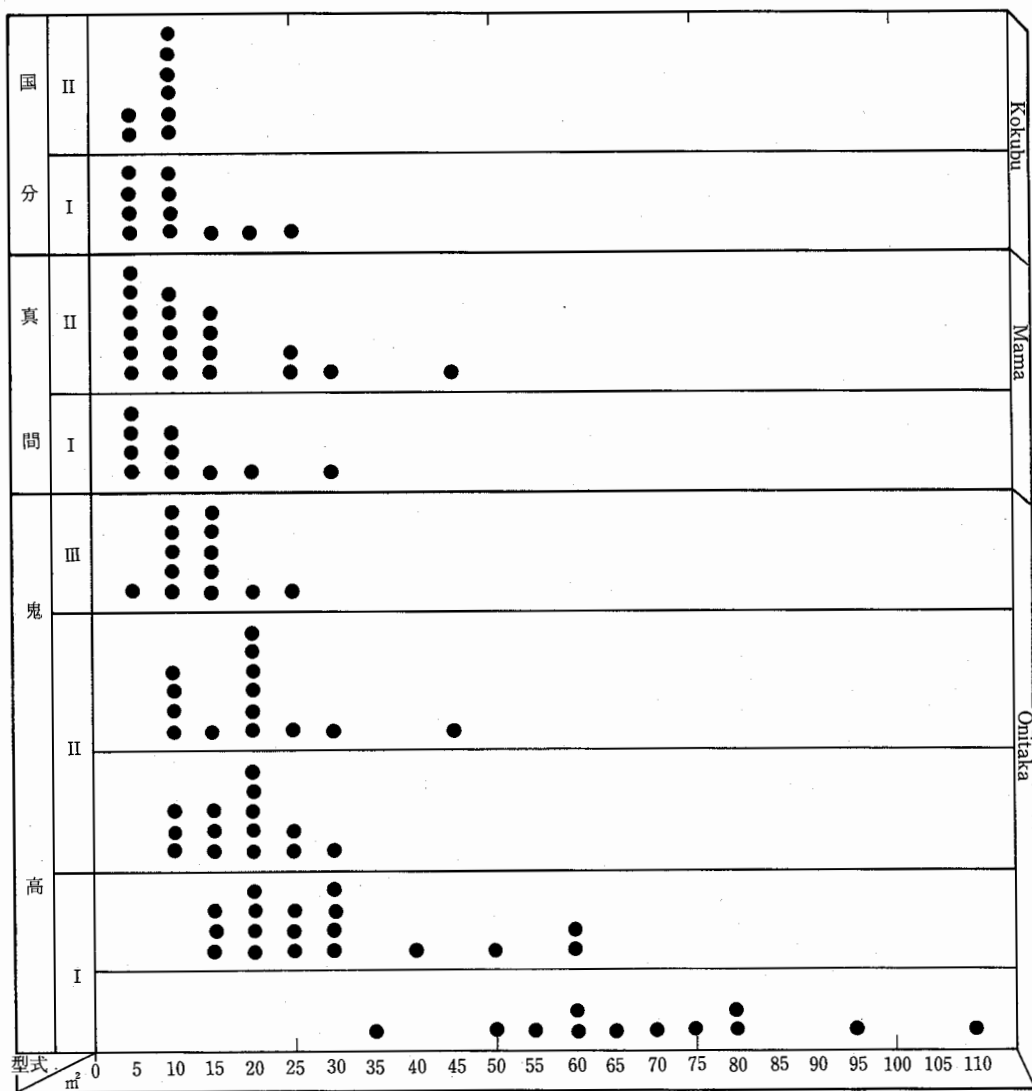


〈図表 1〉 竪穴の平面（縦横壁長の相関図）

Fig. 1 Correlation by periods of the length and the width of house walls.

分期の五つにまとめて囲ったが、小型化と長方形化、次第に変異が大きくなる様子がみてとれる。

一方、各時期の住居の床面積の推移を示したのが、〈図表 2〉である。床面積は周溝の内側でとらえ $5 m^2$ ごとに二捨三入した。これで見ると、鬼高期 I、特にその前半の住居は大型なものが多く、当集落では特殊な時期であったように思われる。鬼高期 I 後半からは、似たような型がみられるようになり、少しずつ床面積の小型化が進んで行く。各時期の総床面積と、1 軒の平均床面積は次の通りである。



〈図表 2〉 住居址床面積の推移

Fig. 2 Temporal change in floor area.

鬼高期 I 前 $840\text{m}^2 \div 12\text{軒} = 70\text{m}^2$

// I 後 $518\text{m}^2 \div 17\text{軒} = 30\text{m}^2$

〃 II前 $263\text{m}^2 \div 14\text{軒} = 19\text{m}^2$

〃 II後 $264\text{m}^2 \div 14\text{軒} = 19\text{m}^2$

// III $178\text{m}^2 \div 13\text{軒} = 13.7\text{m}^2$

真間期 I $125\text{m}^2 \div 10\text{軒} = 12.5\text{m}^2$

// II $268\text{m}^2 \div 19\text{軒} = 14.1\text{m}^2$

国分期 I $119\text{m}^2 \div 11\text{軒} = 10.8\text{m}^2$

“ II $74\text{m}^2 \div 8\text{軒} = 9.3\text{m}^2$

(総床面積÷住居数=平均床面積)

中田遺跡は集落全体を発掘したものではあるが低台地の縁で既に崩れてしまったり、後世の攪乱により破壊されたり、一部発掘できなかった部分もある。そこで、示した数字は厳密さを欠くが、破壊された部分は全体の傾向を損ってしまう程の量ではなく、変遷の目安を掴むことはできたと思う。

また以上の数字は必ずしも同時に建てられていた家の総面積とはいえず、その点でも厳密さを欠いているが、鬼高期 I 前半の 840m^2 という数字は桁はずれて大きいように思われる。しかし、柱穴で囲まれた居住のための区域、竈・入口部分の面積を差引くと、 310m^2 となる。次に鬼高期 I 後半では 244m^2 となり、総面積では 330m^2 もの差があったが、就寝のための空間では 65m^2 の差しかないことになる。この割合で考えるならば、居住人口の差は床総面積にあらわれた程の違いはないことになるが、それでもなお差は歴然としており、人口は減少する傾向にあったものと思われる。また、居住区域の広さが、床総面積を広くしていたことは、やはり生活の豊かさを示しているように思われるのである。

2) 竈と貯蔵穴

竈についての図表は省略した。竈の位置は焚口から煙道までの縦方向と、左右の横方向について考える必要がある。はじめに縦方向についてみると、鬼高期 I では前後半とも竈全体が竪穴の壁の内側に作られる。鬼高期 II の時期になると、煙道部分がわずかながら壁の外へ掘り込まれるものがあらわれ、鬼高期 II で 20%、鬼高期 III では 38% に達する。真間期になると一挙に、竈構造の $\frac{1}{3}$ から $\frac{1}{2}$ が室外に出して造られるようになり、これが全体の 65% を占める。室内につくられるのはわずか 10% であった。国分期には焚口だけが室内に残り、その他すべてが壁の外につくられるものが 50% を越し、壁の内側につくられるものは一つも残らない。

次に横方向についてみると、鬼高期 I では壁の中央付近にあるが、鬼高期 II には多少右に寄るもの、稀には左に寄るものがあらわれはじめる。このことは、鬼高期 III でも同じで 20% 位の頻度でみられる。真間期では中央付近のものがほとんどなくなり、60% 以上が、左右に片寄って、その位置は、壁の隅から $\frac{1}{4} \sim \frac{2}{5}$ の間に移っている。この傾向は国分期にも続くが、壁の中央に位置するものも依然として残っている。

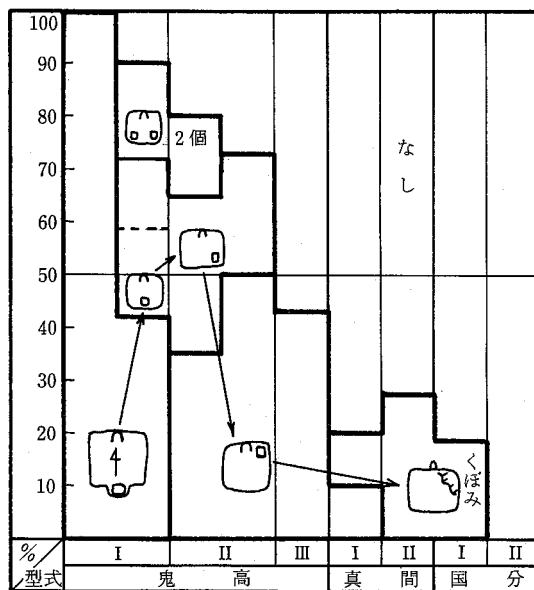
竈を作る際に、鬼高期 I では周溝を全体に掘りめぐらしてからその上に築いていたことは既に述べた。竈の下を掘り窪めることはなされているが、鬼高期 II でもこの方式は変らない。竈の位置を予定するようになるのは、鬼高期 III からはじまるものと思われる。真間期・国分期を通じてこの傾向は強まり、国分期では竈をつくって後に壁を仕上げるらしく、竈の両側で壁が直線にならないこともしばしばである。

竈自体の構造も次第に変化して行く。鬼高期初頭の竈はあまり高くなく、平面馬蹄形に築か

れている。大きさは、幅1m、奥行も1m前後で、これは住居の大きさによって変化するようである。竈が低いので焚口に袖芯を使用する場合にも、前後に長く横たえる方式をとる。竈の中央には高坏などの台を据え、煙道も作られた。鬼高期IIの半ば頃から竈は高く築かれるようになり、火床を掘り下げることがはっきりしてくる。これは甕の下甕に使用する甕の高さが長くなるのと相互に関連していると思われる。袖芯には長胴甕や切石を縦位置に用い、上端にも切石を渡して焚口をしっかりと奥を高く築くという構造に変化する。この構造は国分期まで続くが、竈の堅固さや築く労力の点から住居の壁を掘り込むことを考案したものと思われる。これはまた、住居が狭くなる、あるいは狭く作ることも関連したものであろう。上屋の構造がはっきりしないので確かなことはいえないが、煙道は鬼高期の最初からありながら、その末端で屋外に排気させていた証拠が見出せない。この点今後検討を要するが、当集落の住居で屋外排気がはっきりするのは、竈が半分室外につくり出される真間期からである。

竈とともに炊事用の土器を出土する特殊な場所として、もう一カ所注目されたのが貯蔵穴である。貯蔵穴は床面に掘り窪められた四角い穴で代表されるが、時期を追って〈図表3〉に示したように変化して行く。この図表は横軸に時期をとり、縦軸に貯蔵穴をもつ家の数を%で示してある。貯蔵穴は時期によって設置される場所が変化するので、同じ位置にあるものを太線で囲った。

鬼高期Iの前半では、貯蔵穴は竈と反対側の壁中央に、壁から外に掘出してつくられる。俗に張出しピットと呼んでいるが、鬼高期I後半には四角かった穴の形が崩れ、遂に壁の内側に入っ



〈図表3〉 貯蔵穴の変遷

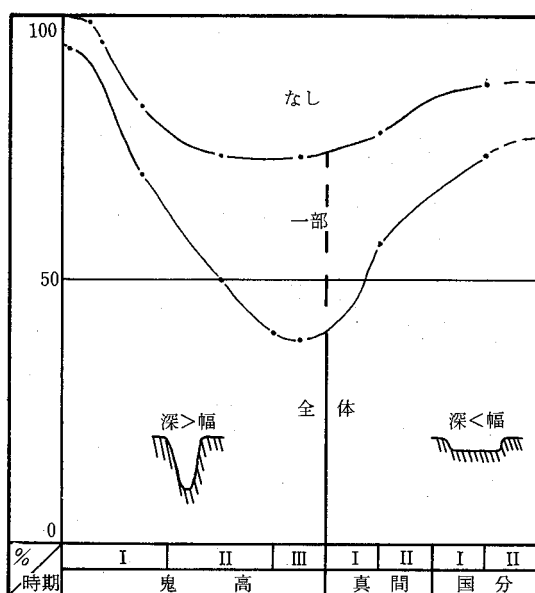
Fig. 3 The frequency and the location of storage pits.

て張出しではないものがあらわれる。やがて、この穴は中央から左右のどちらかの隅に寄り、住居の角にそった四角い貯蔵穴となる。この時期、一部には2個の穴をもつものもみられる。鬼高期Ⅱには、貯蔵穴の位置が次第に竈のある壁の一隅に移り、竈と並んで位置するようになって、鬼高期Ⅲに至ると、竈と遠くはなれた貯蔵穴は姿を消す。厨房施設の一環とみられていた貯蔵穴は、竈の脇に移ることによって、厨房が一カ所にまとめられることになったわけである。一方、鬼高期Ⅲより貯蔵穴のない家が目立つようになり、この時期には50%以上の家が貯蔵穴を持たなくなる。真間期には、ほとんどの家でなくなるが、名残りのような浅い窪みや、周溝の一隅が広くふくらんで、浅い穴をかたちづくる場合がある。この付近が厨房としての機能をひきつづき果たしていたことは、遺物の出方などから判断されたが、国分期Ⅱにはこれらの窪みも姿を消してしまった。貯蔵穴の消滅は、その必要がなくなったことを意味するものである。鬼高期の初頭以来、 1 m^3 以上の容積から 0.05 m^3 前後のものへと小型化が進み、実際に貯蔵される量はいじりしく減少していった。真間期・国分期には大型の貯蔵用甕の一部が発見されることもあるので、このあたりに終末の原因が潜んでいるのかもしれない。

3) 周溝と柱穴

住居構造を支えるものとして、周溝と柱穴が注意される。

周溝については〈図表4〉に示した推移を辿る。この表では、周溝が全体にめぐっているもの、一部分にあるもの、認められないものに分け、各時期別にその数の割合を%で表した。周



〈図表4〉 周溝の推移

Fig. 4 The presence of a ditch and its form.

溝は鬼高期Ⅰ前半では、幅に比べて深さがあるしっかりしたものが、すべての家にみられたが、鬼高期Ⅰ後半になると、必ずしも全体にめぐらされるとは限らず、しっかりしていないものも出てくる。壁体構造の変化などから周溝がさほど意味をもたなくなるのかと考えられたが、鬼高期Ⅲに最低となった後、また復活する。ただし、鬼高期以後の周溝は、巾が広くなり、以前の周溝とは機能の上で変化が生じたものと思われる。鬼高期Ⅰの周溝には15~20cm おきに小さな穴を残すものもあったが、幅広の周溝には小穴を伴うものはなく、面がU字状を示すものが多い。

柱穴については、趨勢としては4本柱基本のものから、柱穴のないものへと変化する推移がみられる。鬼高期Ⅰでは、前半のものにはすべて柱穴があるが、後半になると柱穴のないものがあられ、それらは20m²に満たない家であった。鬼高期Ⅱの家では、25m²以上のものに柱穴があり、20m²前後のものでも13軒中5軒に認められた。鬼高期Ⅲでは最大の23m²の家に4柱穴があるのみで、それ以外の家にはない。真間期の住居も25m²を越す3軒と、15~20m²の家4軒を含めて7軒に4柱穴があり、これは全体の25%にあたる。国分期で4柱穴をもつのは20m²以上の1軒だけであった。以上のことから、一辺5m以上の家には4柱穴があり、一辺4m以下の家にはないという傾向が一般化される。これは小さい家の場合には柱穴を掘らずに上屋を組立てることも可能だったという考えを生むものであろう。柱穴はなくとも周溝の四角が円形にふくらんで、あたかも柱を立てたかのような痕跡を残すものがあったし、かつて非常に浅い4柱穴のまわりに粘土が積まれて、柱の根元を補強したとみられる家を発掘したこともある。柱穴は必ずしも掘らねばならぬものではないかもしれない。

一方、大型住居では主柱穴の他にいくつもの副柱穴がみられた。それらのなかには出入口を類推させるものもあったが、はっきりしたことはいえない。柱穴間が踏みかためられ、その内側が居住区だったことは既に指摘され⁴⁾、また未開社会の家のほとんどがそうである。当集落では、柱穴の外側が1mから1.5m前後のものが多く、したがって大型の住居では柱の内部が広がっている。鬼高期Ⅰの場合でも、床面全体が正方形でも柱の内部は正方形にならず、例えば、2m×2.5m、2.5m×2.8m、3.5m×3m、3.7m×3.5m、4.8m×4.5mのように変化がある⁵⁾6本、12本柱の場合には(2.5m+2m)×5m、(2.5m+2.7m)×5m、(1.8m+1.7m+1.8m)×(1.9m+1.8m+1.8m)と、さらに柱穴の内部が広がって行く。

IV 結 語

住居の構造を分析し、A. D. 500年代から900年頃までの庶民の家の変遷を辿ってみた。住居の変化が一村落のなかで、350年余にわたって求められることは、きわめて稀である。中田遺跡では地形的に集落の範囲が明確であり、重複して建替えられたことが少ないという幸運と、村全体が綿密に発掘調査できたことが、成果をもたらすことにつながった。

その結果判明したことは、前章で詳しく述べたが、6世紀には正方形で整然としていた大型の家が、小型化・簡素化していく過程が鮮明に示された。それは国家体制の確立とともに、庶民が貧しさを増して行った表れのように思われる。8世紀に入ると、大型の家にもみ作業用の道具が発見され、住居の小型化とともに作業場の分離が起ったことも考えられる。竈は、日本の稲作文化が作り出した、特徴的な炊飯用施設である。6世紀に発明され、以後火力の強い燃料が普及するまで、1400年にわたって使われ続けた。初めは高さも低く屋内に築かれていたが、改良が重ねられ構造的に完成されたものとなって、竈を基礎に家が作られることとなった。竈に関する儀礼が民族のなかに定着する素地を固めたといえる。竈の位置が壁の中央から隅に移動し、屋外に造られるようになるのも、縮少した住居面積を補うためのものであったとみられる。住居の小型化・簡素化がすすめられていくなかで、壁体の変化が注意される。6世紀の家では、壁体設備を示す周溝が細く、棒状のものを植込んで支えとし壁体を作ったことが知られるが、8世紀以後は巾広の溝に板状の木材が立て並べられたと推定される。

次に個々の住居から家相互の関係に目を移したい。

かつて、この時代の住居は「同じ方向をむいて建てられている」と観察されていた。たしかに近隣の家は似たような方角を向いて建っている。今回の調査でもN-3°~8°-E方向の住居址が多く、小数の調査ならば同方向のもののみを発掘することは充分あり得る。しかし、集落全体を発掘してその多様さを知ることになった。これを時期別に追って行くと、時期による違いというよりは、建てられた位置によって規定されたと考えた方がよさそうであった。これには自然条件による位置と文化的な位置の双方の要因が働いているので、単純には論じることは出来ない。また、同一時期の比較的近い位置にある家でもN-50°-WからN-20°-Eまで70°の開きがあるという場合もあらわれている。

各時期における住居の棟数や床面積について一応の結論は出たが、現在の分析だけでは、まだ人口を示すことは差控えるべきかもしれない。中田遺跡から水田をへだてて北の台地には甲の原遺跡があり、また南にも水田をへだてて山王林遺跡がある。これらの同時代の遺跡を考慮にいれても、当集落の水田耕作可能地は7~8町歩位はあったものと思われる。とすれば、口分田の男子1人2反を頭においてある程度の推測は可能であろう。

人口とともに、ここに住んだ人々の家族構成や親族構成にまで考え及ぶたいのは当然であるが、そのためには更に推測を重ねなければならない。武蔵野付近の古代の戸籍については、下総・大嶋郷の養老の戸籍がしばしば参考として使われている。この戸籍は同族制の母体となる大家族制の上に、更にさまざまな者が加わって複雑な様相をみせている。これを同居家族別に分類すると、10名を越えるものもあり、一辺8~9m級の大型住居が望まれるわけである(前述の計算によれば寝るための場所20~35m²程度)。実際には、当遺跡ではこのような大型住居は、鬼高期I以来つくりだされていない。そこで一家族1軒とは限らず、更に細かく住み分けられていたのではないかと思う。2軒が特別な紐帯で結ばれていたと考えられる、隣り合わせの家があ

る。これは土器製作法が一致し同時性が考えられるとともに、住居のたてられた向きが一致していることで注意されたものだが、このまとまりを一家族と考えることは可能であろう。

この集落は⁶⁾低台地の中心部にある大型の家9軒と、その西の4軒で住みはじめられたのではないと思われる。前にも述べたように、9軒が同時にたてられたとは考えられないが、この前後差を見究めることは現在のところ難かしい。次に西側に3軒、続いて4軒と建て増され、鬼高期Ⅰの末には西に7軒、中央に7軒、新たに東に3軒がたてられたと思われる。続いて鬼高期Ⅱ前半には、中央と西の間に11軒(鍛冶址を含む)、東に5軒、鬼高期Ⅱ後半には、西と中央の間に9軒、中央と東の間に4軒、東のはずれに1軒という配置になる。鬼高期Ⅲには、中央から西にかけて13軒がひとかたまりで存在するだけである。

この変化は、家をたて代える時、同じ場所を選ばず、次第に西へと動き、東の空いた部分が新たに利用される過程と読みとることができる。

真間期Ⅰには西と中央に2軒と7軒、東にはなれて1軒がある。真間期Ⅱには西から東にかけて19軒が広がり、強いていえば3～4軒ずつまとめることができる。

国分期Ⅰには、西に2軒、中央に9(5+4)軒、国分期Ⅱには西に3軒、中央4軒、中間に1軒となり、この集落は終りを告げる。

以上の動きをみると、東から西へ移動して行く傾向と同時に、中央部から南北方向へと住みかえられて行く動きも見られている。そして、同時に建っていた家は20軒に達することがなかったことも示された。

各時期の住居の相互関係や、人口の消長は、このような分析を基礎とし、更に発展させてとらえる努力を続けなければならないと思う。有機質を100%残存する遺跡でみると、石器や骨角器の占める割合は、物質文化の5%でしかないという結果が報じられ、この5%から当時の生活や社会を復元することは、たじろがざるを得ない面もある。しかし、当遺跡では、水利・治水の施設や塵芥捨場、鍛冶址などが解っている。また土器を焼いた場所は不明であるが、制作のための粘土が各所に貯えられていることも知られている。これらの資料で肉付けした集落の実体は、是非明らかにされねばならないであろう。

註

- 1) 岡田淳子他 八王子市中田遺跡 資料編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 八王子市教育委員会 1972-3
- 2) 岡田淳子・服部敬史 土師器の編年に関する試論 八王子市中田遺跡 資料編Ⅲ所収 1973
- 3) 都出比呂志 竪穴式住居の周堤と壁体 考古学研究 22-2
- 4) 和島誠一・金井塚良一 集落と共同体 日本の考古学Ⅴ 河出書房
- 5) 櫛 国男 竪穴住居の設計計画(上・下) 考古学雑誌 52-4 53-2 の研究があるが、崩壊や誤差により尺指を当てることは困難である。
- 6) 服部敬史 関東地方における古墳時代後期の集落構成 考古学研究 第24回総会要旨 1979